

第3回KVBCオープンセミナー
「歴代京都ベンチャー大賞受賞企業に聞く、
その後のビジネス展開」

第3回KVBCオープンセミナー

「歴代京都ベンチャー大賞受賞企業に聞く、
その後のビジネス展開」

去る11月15日、過去6回のベンチャー大賞受賞企業をお招きして第3回目のオープンセミナーが開催されました。始めに、鳥田與三右衛門・京都市産業観光局長と岸根明・日本経済新聞社京都支社長から挨拶があり、その後、(株)サムコインターナショナル研究所社長による特別講演が行われました(※特別講演についてはSHL1月号に掲載予定)。

続いて、過去6回の京都ベンチャー大賞の受賞企業によるプレゼンテーションが発表されました。



会場風景



右側から順にパネリストの長澤氏、石橋氏、山田氏、向園氏、蜷川氏、椿森氏、コーディネーターの築地氏

(株)ハネックス・ロード 椿森 信一氏
第1回1990年 京都ベンチャー大賞受賞

●受賞テーマ

エポ工法 EPO Method「Easyより簡便な工法 Promptより速やかな工法 Originalityより独創的な工法」
～建設業界における省力化工法の開発～

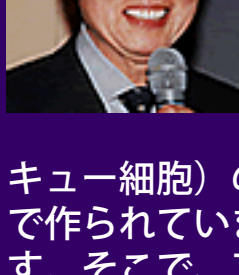


エポ工法というのは、円いマンホールを円く切るという発想のもとで、従来の四角い復旧面積を約8分の1に縮小、実現できるという世界初のマンホール取替施工技術です。今、マンホールの数は日本全国で1300万～1400万個。耐久年数を20年と考えると、全体の約5%に当たる約65万個のマンホールが1年間に取り替えられているということになります。私たちはこうしたマーケットサイズに着目し、知的所有権をベースとして、全国の建設業者さんをユーザーとして、技術提携実施許諾契約書を締結し、システム化されたエポ工法として工法販売を行う。そのエポ工法を具現化するために開発された資機材やシステム機器、車輛等の販売や又イニシャルペイメント、ロイヤリティー収入を契約に基づいて行う。と同時に、全国エポ工法協会という組織を立ち上げて、現在全国約100社の会員を組織してきた。そして、建設省の公的な機関の技術認定を取得し、各占有企業や道路管理者に工法普及拡大を協会活動として会員と共に進めてきました。創業して20年が経ちますが、Aという技術からCという技術へいきなりたどり着いたわけではなく、半歩ずつ努力を重ねて歩んできた結果だと思えます。これからも、世界一のマンホール修理屋として、オンリーワン起業として、自信と誇りをもって取り組んでいきたいと考えています。

(株)シルク工芸 蜷川 隆氏
第3回1994年 京都ベンチャー大賞受賞

●受賞テーマ

シルクロードに永遠のロマンを求めて、新素材「絹紙」「絹箔」を今、西陣から



不織布というのは、繭の屑であるシルクトップを細かく刻んだ、織物でない布生地のこと。復元性や防かび性に優れていることから、医療用シルクガーゼとして製品化できるよう厚生労働省に認可申請を行っているところです。もう一つ、繭を生かした分野で市場を開拓していくために、京都工芸繊維大学と共同で細胞のバイオード(人間の身体を回復させてくれるレスキュー細胞)の研究に取り組んでいます。現在、バイオードは豚の細胞で作られていますが、人間の身体に注入すると異反応が起きやすいのです。そこで、アレルギーがまったく起こらない繭からバイオードを作ろうと考えたわけです。この研究が進めば、将来的にドナーが要らない骨髄移植が可能になるかもしれません。すでに、マウスにラットの足をひっつけて動かすという段階まで来ています。繭産業というのは、まさに21世紀の産業をリードしていく分野ではないかと私たちも期待しているところです。

サツマ通信工業(株) 向園 好信氏
第3回1994年 京都ベンチャー奨励賞受賞

●受賞テーマ

簡単かつ経済的にプリント配線板の銅表面に液状レジストを塗布する装置の研究・開発



従来、プリント基板はドライフィルムを基板表面に貼って、それを現像してエッチングするという形成方法でしたが、当社ではレジスト溶液の中にプリント基板を浸して引き上げれば、自動的にコーティングできるという「レジストコーター」という装置を開発しました。近年、電子部品の小型化が進んでいますが、この装置を使えば約20ミクロン程度の高密度多層化が可能となります。さらに、この装置を全自動化したものが「全自動ディップコーター」です。溶液の供給や濃度管理などすべてオートメーションで行うことができ、1時間で約360枚のプリント基板を製造することが可能です。スピードアップとコスト削減、省力化を実現したことにより、台湾や韓国などからも問い合わせをいただいています。パテントについては、装置そのものでなく、装置の自動化を進めていく過程で派生した技術で取得しました。今後は、日本企業の中国進出をにらみ、アジア圏に市場を広げていきたいと思っています。

山田技研(株) 山田 忠幸氏
第5回1998年 京都ベンチャー大賞受賞

●受賞テーマ

幹線道路の冬期維持管理に関する多目的センサの開発



これまでの融雪センサというのは、雪が降っていれば融雪し、雪がやめば融雪を中止するというものでした。私は、気象条件と路面状態の相関性に注目し、道路の融雪に必要な熱量を自動計測して必要な量だけを融雪する「省エネ融雪センサ」を開発しました。さらに、こうしたセンサ技術を発展させ、道路の観測データを目に見えない形で発信していくために、路面反射率や温度など人間が感知しなければならぬ情報を計測して数値化するという技術を開発しました。路面情報を横断的にとらえることが可能となり、国土交通省などで幅広く採用されています。当社では、雪をコンサルタントするという考えを持っており、「情報」「環境」「エネルギー」という3つの視点で事業を展開していくことにしています。最近では、雪を使ってマイナス20度の世界を調査研究する受託事業も進めており、市場はまだこれから開けていくのではないかと考えています。

(株)カーボテック 石橋 昇氏
第6回2000年 京都ベンチャー奨励賞受賞

●受賞テーマ

複合炭素材を用いた微生物担体の開発によるリサイクル推進

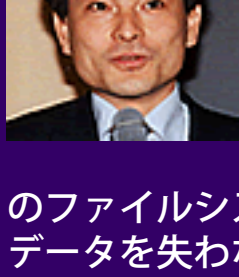


バイオマスとは、生物に由来する廃棄物や建築廃材、生ゴミなどのことです。従来、活性炭というのは石炭や木材を炭化して作っていましたが、私どもではバイオマスの中に触媒的な役割を果たす添加剤を加え、活性炭に近い高度な「多孔体」を開発しました。現在、環境調節剤や土壌改良剤などを開発しています。環境ビジネスに「入口」と「出口」があるとするならば、その出口側の用途を広げようということで、優良な微生物担体を使って、土壌や水質の浄化を進める品体固定実験などを第1テーマとして取り組んでいます。現在、行政向けにダイオキシン吸着剤、民間向けに吸着剤の提供、その他受託研究などに力点を置いており、一定の市場を形成できたのではないかと考えています。今期の売上高は1億9千万円、経常利益は10%を確保することができたので、来年はバイオマス活性炭の用途開発をさらに押し広げながら、3億円の売上高を目標に頑張っていくと考えています。

(株)京都ソフトウェアリサーチ 長澤 恒也氏
第6回2000年 京都ベンチャー奨励賞受賞

●受賞テーマ

高信頼性・フラッシュメモリファイルシステムFugue(フーガ)の開発・販売



携帯電話の電源を切ってもデータやプログラムが消えないのは、内部のフラッシュメモリに記憶させているからです。しかし、iモードやezwebなど携帯電話がネットワークでつながり、画像や音声、電子メールなどのマルチメディアを、ユーザーニーズに合わせてカスタマイズできるようになると、「ファイルシステム」というものが必要になってきました。私たちはこのファイルシステムに注目し、不用意に電源が切れてしまってもそのデータを失わない、また損傷のあるデータを見つけたらそれを瞬時に判断して修復するファイルシステムを開発しました。現在、大手家電メーカーや産業用機器メーカーなど40社以上と取引をさせていただき、その用途も留守番電話のICやバーコード端末などに広がっています。まだまだ会社規模としてはこれからですが、今後は皆さまのご支援をいただきながら、商品を世の中に広く問うていきたいと思っています。